

日 本 の 点 字

第 37 号

目 次

私は“カミ”を信じます	福井 哲也	… 1
特集「直居鉄さんを偲んで」		4
直居さんを偲んで	阿佐 博	… 5
直居鉄先生を偲ぶ	田中 徹二	… 6
硬軟併せ持った直居鉄先生の思い出	当山 啓	… 8
「日本点字表記法」のあり方について	日本点字委員会事務局	… 17
特別講演会「英国における国際統一英語点字の導入過程とその課題」報告		29
ホームページ開設から1年		34
点字関係文献目録（その13）		37
日本点字委員会研究協議会並びに第48回総会報告		40
編集後記		42

2013年2月

日 本 点 字 委 員 会

私は“カミ”を信じます

日本点字委員会委員 福井 ^{てつや} 哲也

「ペーパーブレイル」という言葉を初めて聞いたのは、二十歳のころ(1978年か79年ごろ)だったと思う。フランスで開発されたエリンファという機械が日本のどこかで展示されたという噂を聞いた。しかし、「ペーパーブレイル(紙のない点字)」といわれても、いかなる代物なのか、さっぱり見当がつかなかった。

それから数年後、四谷の日本盲人職能開発センターで、アメリカのテレセンサリー社が開発したバーサブレイルという機械を見せてもらった。その機械には、たしか20マスの点字ディスプレイとたくさんのボタンが付いていて、記憶媒体はカセットテープだった。カセットテープをセットしてスイッチを入れると、テープがカタカタと回り、点字ディスプレイに「busy」の4文字が表示された。まだ何もしないうちから「ビジー(忙しいぞ)」なんて、変な機械だと思った。

カセットテープには童話の一節のような文章が入っていて、それをディスプレイで読んだ。20マスのディスプレイには3語ぐらいしか入らないので、ディスプレイのそばのバーを押して次々進めなければならず、まどろこしく感じたのを覚えている。値段は200万円を超えると聞いた。だが、これを何に使うのか、どこが便利なのか、当時の私にはほとんどイメージできなかった。その機械は試験的に輸入されただけで、日本で市販されることはなかった。

1987年、このバーサブレイルの後継機であるバーサブレイルⅡプラスが日本でも販売されることになった。ディスプレイは同じ20マス、記憶媒体は3.5インチフロッピーディスク。点字入力キーボードがあり、エディタなどのソフトが内蔵された、一体型の電子点字筆記具であった。サイズはノートパソコンより二回りは大きく、重さは5キロ以上あった。価格は120万円と高価だったが、私を含め何人もの「点字大好き人間」が購入に踏み切った。

私がバーサブレイルⅡプラスに対して「これはいける！使いたい！」とインスピレーションを感じたのは、読書機としてではない。筆記具としてである。そして、その期待はみごとに当たった。日々の仕事の記録・住所録・原稿など、さまざまな「点字で書く」作業が格段に便利になった。以来25年、私は点字ディスプレイを何台か買い換えてきたが(その中には一体型もパソコン接続型もある)、私の点字ディスプレイに対する基本的評価やその用途はほとんど変わらない。

点字ディスプレイは、点字エディタや点字プリンタとともに、点字を書いたり編集

したりするとき最も力を発揮するデバイスである。そして、点訳辞書に代表されるように、データ検索の場面でも欠かせない存在である。だが、こと読書という場面では、残念ながら点字ディスプレイはまだ非常に不十分な機械といわざるを得ない。最大の弱点は、表示領域が1行（小型のモデルでは半行）しかないことである。

1本の指で同時に触れられる範囲はせいぜい点字一マス分に過ぎないのだから、広い視野を持つ視覚とは異なり、触覚による読書では、両手読みのことを考慮したとしても、1行分の表示でさほど困らないのではないか——そんな考えがあるとしたら、それはまるで違うと私は思う。紙の点字書を読むときには、見開き2ページが体の前にある。その全体にまったく同時に触れられるわけではないが、経時的に読み進み、あるいはときに戻ったりしながら、2次元的な全体像として頭の中に構成される。指が行を辿りつつ感じられるページの広がり、そして手でページをめくるという動作を通じてとらえられる前後のページとの繋がりや距離感が、とても大切だと思う。

両手読みの指運びについていえば、紙の点字では、右手が前の行の行末に触れているとき、左手はすでに次の行の行頭にあり、両手の動きは一瞬重なり合う。1行表示の点字ディスプレイでは、この一瞬の重なり合いがないことと、表示を進めるためのボタン操作が入るために、読みの連続性がどうしても損なわれてしまうと感じる。

複雑な内容の文章を注意深く読み解くとき、あるいは行間に秘められた筆者の想いを汲み取りながら文章を深く味わうとき、点字を辿る指は自然と前後の行を行き来する。ふと感じた疑問に、右手の指は今読んでいるところに留めながら、左手を数行前あるいは前の段落に走らせるということもある。こういった動作は今の点字ディスプレイでは不可能だ。

点字のレイアウトに対する感覚も、点字ディスプレイではずいぶん薄いものになってしまう。例えば見出し——行頭からの下げ幅というのは、上下の行との比較においてははっきり認識されるものだ。行あけも同じこと。一度ボタンを押してディスプレイ上の点字が全部消え、もう一度ボタンを押して次の文が出てきた——ああ1行あいていたのか、ではなんとも心許ない。枠囲みも上下の広がりが前提の符号だし、項目を縦横にそろえて書かれた表は、上下の項目に自由に指を走らせることができ初めて意味を持つ。

点字ディスプレイの発明が、点字触読者に大きな福音であったことは間違いない。1行の表示でも、さらりと読み流せる数ページの文章なら、さほど苦労なく読める。だが、じっくり内容を吟味したいものや複雑な構成の文章となると、紙の読書の快適さには遠く及ばないのが現状なのである。

私は強く願う。軽くて薄型の点字ページディスプレイ（B5サイズ、18行程度）が

一日も早く開発されることを。そのような研究がすでに行われていることは承知しているが、成功を確信する段階にはまだ達していないと思う。点字触読者がITを十分に活用するために、点字ページディスプレイは不可欠のデバイスであると考える。

一方、紙の点字の有用性はいずれ失われるのであろうか。私はけっしてそんなことはないと思っている。将来点字ディスプレイが大幅に進化し、紙の点字に近い読みごこちが実現されたとしても、点字ディスプレイは映画でいえばスクリーンのようなもの。映写機のスイッチを切れば、画像は消えてなくなる。点字資料は今や電子データにより製作されるのがきわめて一般的となっているが、私たちはデータに直接触れることはできない。ある場合にはそれをディスプレイに映して短時間眺めて消し、ある場合には実体感を伴う紙にプリントして熟読し保存する。そういう使い分けは今後も基本的に変わらないと私は考える。

もう一つ、文章を書く際にも紙の点字は重要な役割を果たすと私は思っている。これは個人差があると思うが、私の場合、原稿や報告書など少しまとまったものを書くとき、最初から機械に向かってもどうもうまく捗らない。筆の遅い私は、最初点字盤に向かい、頭に浮かぶあれこれをコツコツと書き付けていく。そうやって点筆を動かしているうちに、だんだん考えがまとまってきたら、機械のスイッチを入れる。この最初のプロセスは、電子機器ではいけない。点筆が一点ずつ紙を穿つ感触が、手を伝わり脳を刺激するのだと私は信じている。点字は、私たちの体に密着した文字なのである。

最近、若い視覚障害者の中で、点字はある程度読めるのに積極的に使おうとせず、もっぱらパソコンで墨字の読み書きばかりという人が増えているように思う。もしかして、学校時代に点字を熱心に指導する先生に出合えなかったのだろうか。パソコンの発達で、私たち視覚障害者も墨字の読み書きが可能になったのはすばらしいことだ。しかし、私たちは墨字を完全に自分の文字とすることができない。常に機械を介してしかアクセスできないからだ。私たちの体に密着する文字となりうるのは点字である。点字は、情報摂取・通信手段であると同時に、ものを考える手段となるはずだ。

点字の習得には、それなりに時間がかかるし、根気も必要だ。だからこそ、若いうちにしっかり点字を身につけてほしい。もちろん、紙に書き、紙で読むことをまず基本としたい。パソコンなどの電子機器は便利にできていて、とっつきやすい。そういうものは、後からでも十分間に合うと私は思うのだ。

200年前、天才ルイ・ブライユが、紙に書きながら研究を重ね生み出したこのすばらしい文字を、私たちも紙に書いて伝えていきたいものである。

特集「直居鉄さんを偲んで」

直居鉄さんが2012年2月29日、永眠されました。享年85でした。

直居さんは、日本点字委員会第6期～第8期（1990～2001年度）に学識経験委員、および事務局長としてお働きくださいました。特に下澤^{まさし}仁さんの後任の事務局長として、阿佐博会長とともに会の運営に力を発揮されました。退任後は会友として、亡くなるまで会を支えてくださいました。

「日本の点字」では、直居鉄さんを偲んで特集を組み、阿佐博、田中徹二、当山啓の3人の方々に執筆をお願いしました。

直居鉄氏略歴

1926(大15)年 東京に生まれる。

1940(昭15)年 東京市立南山^{なんざん}小学校視力保存学級卒業

1945(昭20)年 官立東京盲学校中等部鍼按科卒業

1949(昭24)年 同校師範部鍼按科卒業

1949(昭24)年～1950(昭25)年 神奈川県立平塚盲学校教諭

1950(昭25)年 早稲田大学教育学部教育学科編入学

1952(昭27)年 同校卒業

1953(昭28)年～1982(昭57)年 東京都立文京盲学校教諭

1982(昭57)年～1991(平3)年 日本点字図書館副館長、常務理事

1989(平元)年～2001(平13)年 白梅学園短期大学講師

1992(平4)年～1997(平9)年 日本社会事業大学講師

2001(平13)年～2008(平20)年 国際視覚障害者援護協会理事長

2009(平21)年 旭日双光章受章

2012(平24)年 永眠。享年85。

そのほかの経歴。日本盲人福祉研究会大学進学対策委員長、日本図書館協会障害者サービス委員会委員、世界図書館連盟盲人図書館東京会議事務局長、日本盲人社会福祉施設協議会点字図書館部会長。

直居さんを偲んで

日本点字委員会顧問 阿佐 博

私が第4代日本点字委員会の会長に選出されたのは1990年のことであった。それから3期12年会長を務め、2002年に退いたのである。その間事務局長として働いてくれたのが直居さんであった。

直居さんは私の4年後輩であった。だから私が母校官立東京盲学校の教員に就任した頃はまだ学生だった。当時は残存視力がかなりあって、弱視の生徒として私の仕事の手伝いをしてくれたこともあった。後に都立文京盲学校の理療科教員に就任してからは、同僚として関東地区理療科教育研究会（関理研）の役員として、一緒に仕事をすることもあった。

また「ツリナの会」のメンバーとして、夫人ともども一泊二日くらいの小旅行に出かけたこともよくあった。「ツリナ」とはNHKのことだ。「ツリナの会」といったようなネーミングができるのは、点字を理解している者の特権で、一般の人には意味のわからないネーミングであろう。そのころNHKには「盲人の時間」という番組があった。今日の「聞いて聞かせて～ブラインド・ロービジョン・ネット～」の前身だ。「ツリナの会」とは、その番組に深く関わった者たちで作った会である。

直居さんは教員生活半ばにして、日本点字図書館（日点）の副館長として迎えられた。本間館長は私たちに「図書館の将来を考えて、有力な人に来てもらったんだ」と話していた。私はいずれ直居さんが日点の館長になるのだろうと考えていた。

ところが私が日点委会長に選出された1990年度に突如日点を退かれたのだった。「自分の人生設計に基づくものだ」と言っていたが、おそらく何かの事情があったのだろう。私は以前から親しい人だったので、「日点を退くのなら日点委の事務局長になってほしい」と頼んでみた。直居さんは「点字の世界に住んでいるので、点字に関する仕事もいろいろやってきたが、表記の研究に関する仕事はやったことがなかったから」と言って快く承諾してくれた。当時、当山啓さんが事務局員を務めていたので、その後12年間、当山さんとの名コンビで事務局を担当してくれたのであった。

日点委総会における直居さんの事業報告や決算報告には、一つの特徴があった。報告にいつも前文が付いていたのだ。それはその1年間の出来事を分析したものであった。私はいろいろな会に関係してきたが、事業報告にあのような前文の付いたものを

見たことはなかった。直居さんはおそらく何かの信念に基づいて、あの前文を書いていたのだと思う。

実は「ツリナの会」は今も続いている。年に数回「ホテルグランドヒル市ヶ谷」を会場として、ワインなどたしなみながらよもやまの話を楽しむのである。直居さんは数年前から腎障害のために透析の生活に入っていたが、その会にだけは喜んで出席していた。普段食事制限をしているので、ステーキやワインは特においしいと言って、出たものは皆平らげていた。その「ツリナの会」で直居さんに会ったのは2011年2月4日が最後になった。その日はいつもと変わったことはなかったのだが、その後急に体調を崩し、同月29日、帰らぬ人となったのである。あまりにも突然のことで私たちも大変驚いたのであった。

直居さんは正義感の強い人であった。誰に対しても思い切った発言のできる人でもあった。少し気の短いところもあったようだ。私は日点の評議員会でも直居さんと席を共にしていた。また一緒にヨーロッパ旅行をしたことも2度あった。最初はまだ教員時代に「盲学校教員のスタディーツアー」としての旅であった。もう1度は、日点委創立30周年記念事業として、ブライユ記念館を訪問することを主目的としての旅であった。そんな中で「この人は厳しい人だな」と思ったことが幾度かあった。しかし日点委事務局長としてはいつも穏やかで楽しい12年であった。

書こうと思えば思い出されることはほかにも多くある。しかし紙数の関係もあり、この辺で筆をおきたいと思う。

直居鉄先生を偲ぶ

日本点字委員会副会長 田中 徹二

私が直居先生と初めてお目にかかったのは、今から半世紀以上前のことである。失明後大学に復学して教職免許を取るために、教育実習をしようとしていたときだ。当時、都立文京盲学校に奉職しておられた先生が大学の先輩だったことから、相談してみたらと勧められたのである。当時の高橋惣^{そういち}市校長に紹介してもらい、学校を訪ねたことを覚えている。しかし、文京盲学校ではなく、一般校で教育実習をしたため、直居先生に残念がられたものだった。

やがて、親しくお話しをするようになったのは、先生が日本盲人福祉研究会（文月会）の役員になられてからだ。進学対策委員会や調査委員会などで指導的な仕事をされ、役員会や総会などで一緒に旅行した。このことについては後述する。

先生は1926(大正15)年10月13日の生まれで、享年85だった。幼少のころから弱視で、小学校はわが国で初めて視力保護学級（弱視学級）を設置した麻布の南山小学校に通学された。その学校には宮下という眼科医が来ていて診てもらったが、「その先生は顔を近づけると口臭が強くていやだったね。その人が歌手の藤原義江と不倫の恋で名を馳せた藤原あきの最初の亭主だったんだよ」と話してくれたことを覚えている。

その後、官立東京盲学校（現、筑波大学附属視覚特別支援学校）に移られ師範部を卒業し、1948(昭和23)年に平塚盲学校に奉職された。しかし、1年で退職され、早稲田大学教育学部教育学科に学士編入した。そのころはまだ墨字が使えていたようだ。

1952(昭和27)年3月に卒業し、1953(昭和28)年4月、都立文京盲学校に奉職した。初めのころは普通科を教えていたが、その後、文京盲学校が小・中等部を分離したのを機に、理療科教員として約30年勤務された。その後、1982(昭和57)年3月に退職、日本点字図書館（日点）副館長に就任されたのだった。先生は、日点の早いころからの読者であり、日点に勤めていた原田ヒサ子さんを射止め、本間一夫館長に仲人をしてもらったという浅からぬ因縁があり、本間館長の強い要請があったという。

日点在職中、先生は、日本盲人社会福祉施設協議会情報サービス部会長をはじめ、国際図書館連盟（IFLA）、日本図書館協会などにも積極的に係わっておられた。日点退職後、当会事務局長に就任して活動しておられたが、私は学識経験委員として参画しながら、すべて日点委については先生にお任せだったので残念ながらよく覚えていない。『日本点字表記法 2001年版』編集課程の議論や『点字表記辞典』の編集には当初から係わっていたので、そちらの記憶のほうがはっきりしている。

したがって、先生との交際は、日点委というより文月会が中心だ。先生が文月会で役員になられたのは1970(昭和45)年。翌年1月に発足した同会の大学進学対策委員会の委員長に就任された。盲大学生と接触し、大学に盲人の入学を認めさせる門戸開放運動や点字試験を要請する入試対策に奔走された。当時盛んだった東京大学や早稲田大学の点訳会の学生と一緒に、こうした運動の先頭に立って活躍されたようである。文京盲学校の理療科教員だったにもかかわらず、早朝から大学に出向き、問題の点訳、解答の墨字訳等に、ボランティアの協力の下、後輩のために尽力された記録がある。1982(昭和57)年、日点の副館長になられたあとも、何度か大学入試に係わられた。

こうした実績を見ると、先生の点字の実力は相当なレベルにあったと言える。

先生は大学進学対策委員長を降りられてから、1972(昭和47)年に発足していた調査研究委員長になられた。初代の委員長は、京都盲学校時代は盲教育界代表委員として、退職後は学識経験委員として、1997(平成9)年まで当会の点字の理論的構築に大きな影響を与えた永井昌彦さんだった。当会にとって浅からぬ縁の人たちが委員長を務めたことになる。

私は長く出版委員長を務めていたので、文月会でこうした人々と深くお付き合いしたことになる。

こうした会以外に、先生とはお酒を飲む機会、趣味の会、その他何かの集いがある都度、必ず顔を合わせるといったように、個人的なお付き合いも深かった。それにふれているとキリがないので、思い出はこれぐらいにするが、晩年は、日点の理事会、NHKの「盲人の時間」(ラジオ第2放送、現「聞いて聞かせて～ブラインド・ロービジョン・ネット～」)の機縁でできた「ツリナの会」(点字のNHKをカナで読めば「ツリナ」になる)などでお目にかかった。また、ときどき電話でお話ししていたが、いつも日点を気にかけてくださり、励ましてくれた。私にとっては、正にいつまでも頼りになる兄貴だったといえる。

硬軟併せ持った直居鉄先生の思い出

日本点字委員会事務局長 とうやま ひらく 当山 啓

出合い

直居先生と最初にお会いしたのはいつのことだったのだろうか。私が日本点字図書館(日点)に就職したのは、1970(昭和45)年のことで、当初、私は庶務係(当時、組織としての正式名称はなかった)だったのだが、先生はよく日点に来館されておられたから、その年のことだったのは間違いあるまい。本間一夫先生の仲人第1号の方だと紹介されたことをうっすらと覚えている。

当時、大学受験で点字受験ができたのは、数えるほどしかなかった。日本盲人福祉研究会(文月会)が中心となって、大学の門戸開放運動を展開していた。1968(昭和

43)年に聖心女子大学 M・S 社会奉仕団の学生たちが募金した資金をもとに、「盲人の高等教育援助委員会」が発足し、事務局として日点の加藤善徳^{よしのり}理事が会計をしていた。盲大学生に対してテープレコーダーや点字タイプライターを貸与していたが、点字使用者が大学受験する際に、当日の早朝から大学へ行って試験問題の点訳や校正をする受験ヘルパーにわずかばかりの謝礼をその基金の中から払っていた。点字受験を認めってもらうのが第1で、大学側が受験ヘルパーに謝礼を払うなど二の次の問題だったからである。それらの支払いを加藤理事から私に託されたのが1971(昭和46)年だったと思う。直居先生が、文月会の大学進学対策委員会の委員長に就任されたのが1970(昭和45)年であるから、その関係でよく先生ともお会いするようになった。私自身も受験ヘルパーとして、点訳や校正を何度か先生と一緒にしたこともある。

1973(昭和48)年、日点が三菱財団からの助成金を受けて、「視覚障害補償機器開発研究会」(通称・点字カセット研究会)を発足した。そのメンバーは、東京工業大学・芝浦工業大学の先生、盲界の有識者、日点職員で構成されていたが、その中に直居先生も加わっていた。ちなみに、当会の現会長・木塚泰弘氏、現副会長・田中徹二氏もメンバーである。私は、1976(昭和51)年1月に総務部から点字出版部に異動したが、その前後にこの会にも関わるようになった。会議の終了後、たまには有志で飲み食いを共にした。そのときに、直居先生が日本酒がお好きであることを知ったのだった。

点字カセット研での議論の結果、点訳者による1冊しかない手書きの点訳書をデータ化し保存して、何冊も複製できるようにしようということになった。当時はプログラムや記録媒体としては、紙テープかカセットテープしかなかった。それで、前述のような通称になったわけである。

この研究で、点字を光学的に読み取り、結果を紙テープに出力することに成功した。紙テープにはコンピュータの8ビットに対応した孔が開けられる。この8個の孔は、点字の①～⑥の点と改行・改ページ^{あな}信号に対応しており、6点点字はコンピュータに適した文字でもあったのだ(記録媒体は程なくカセットテープになった)。この光学読み取りによる点字複写装置は、試作機を経て実用機が完成した。当時パソコンはまだなく、とても高価な(それでも16ビットマシン)コンピュータを使用していたが、読み取った点字データの簡単な編集もでき、カタカナなどへの変換もできた。その成果を公表すべく、マスコミも招いて、1976(昭和51)年に芝浦工大で発表会が催された。後に、このノウハウを活かして1980(昭和55)年に松下通信工業(株)が「ブレイルマスター」(記録媒体は8インチ・フロッピーディスク)として製品化した。

保存された点字コードは、触読できる点字にならなければ意味がない。当時、日本に実用化している点字プリンターはなかった（点字プリンターの開発については、点字カセット研のメンバーでもある筑波大学附属盲学校教諭の長谷川貞夫氏の功績が大きい）。そのため、コンピュータ点字出力機として、(株)小林鉄工所に同社の電動点字製版機の改造を依頼した。前記の装置で点字を読み取り、そのデータにより、改造した点字製版機で亜鉛板に打ち出した最初の点字図書は、本間一夫著の『点字の書き方』だったと記憶している。

点字カセット研は、引き続きコンピュータ駆動専用の自動点字製版機の研究・開発を進めた。これについても三菱財団からの助成金を得た。小林鉄工所が、同会メンバーである芝浦工業大学・入江正^{まさとし}俊先生の協力の下、実験機を経て、双方向印字、高速化、インターポイントも可能にした。1台の点字製版機でインターラインもインターポイントも製版できるのは、世界でも多分これだけである。双方向印字にちなんで名称を「ブレイル・シャトル」（その名付け親は、同会会長の東京工業大学・長谷川健介教授だった）として実用化した。一般公開したのは、1985(昭和60)年である。

直居先生との海外出張

直居先生は、1982(昭和57)年日点の副館長に就任された。本間一夫理事長の要請によるものだが、本間先生は、コンピュータ関係は苦手だったから、特に、この方面でも直居先生のサポートが必要だったし、後継者とも考えておられたであろう。直居先生は、副館長として、あくまで日点利用者へのサービスを最優先するという信念を貫き、職員を時には叱咤もしていたという硬派の面が目立っていたように思う。仕事ではもちろんのこと、個人的にお話しをしたり、お酒などをご一緒する機会も増えた。

1983(昭和58)年、日本聖書協会から西ドイツで点字聖書製作国際会議があるので、日点から職員を派遣してほしいという依頼があった。しかも、その会議から程なくミュンヘンで国際図書館連盟(IFLA)の国際会議がある。日点としてこの機会を逃す手はない。適任者は、当然直居先生である。それが決まったあと、思いもよらず、直居先生から私と一緒にいかないかとの打診があった。私は、海外に行った経験もないし、何より英語がほとんどしゃべれないから、足手まといになるかもしれないとかなり迷いはしたのだが、こんな機会がないとヨーロッパにはまず行かないだろうし、手引きに徹すればいいのかもしれないと考え、お引き受けしたのだった。

その年の8月7日、成田からアンカレッジ経由でフランクフルトに向けて飛び立っ

た。飛行機は、ルフトハンザ・ドイツ航空。日本聖書協会が奮発してくれたのであろう、ビジネスクラスだった。直居先生は確かもう禁煙されていたと思うが、ヘビースモーカーの私のために喫煙席（この頃はまだあった！）にしてくださった。ビジネスクラスの担当スチュワーデス（この頃はキャビンアテンダントという名称はない）は、多分ドイツ人ばかりで、日本語が通じない。会話は先生にお任せして、私は専ら「スカッチ・プリーズ」を連発していた。少なくとも私は、スコッチウイスキーのお陰かよく眠れてフランクフルト空港に着いたとき、大して時差ぼけを感じなかった。空港には日本から連絡があったらしく、ルフトハンザの日本人社員が車椅子を用意して待っていたのには驚かされた。車椅子使用は、丁重にお断りしたのではあるが。

点字聖書製作国際会議は、8月10日～12日、フランクフルトからそう遠くないトラウトハイムという田舎町の「ホテル・バルデスルー」で開催された。とても緑が豊富で静かな所だった。

参加者は、ヨーロッパを中心として、アジア・アフリカを含めた世界各国の点字聖書関係者が一堂に会したと言って良いだろう。会議はすべて英語なので、私にはちんぷんかんぷんだったが、要所を直居先生が伝えてくださった。ただ30年近く経った現在、内容はあまり覚えていない。各国で製作された点字聖書などの点字図書を持ち寄っていた。日本のB5判は、最も小さかったが、造本はトップクラスだったと思う。中には、日本のページはなぜ右上についているのか質問なさった方がいた。点字の数字は世界共通だから、右上にあるのがページだと直ぐに理解されたのだろう。また、東京ヘレン・ケラー点字出版局が製作した固形点字の図書も持っていったのだが、イギリス製の固形点字印刷機をこれだけ実用化していることに驚嘆している方もいた。直居先生が英語でそれらを詳細に説明していたことは、言うまでもない。この会議の参加者のために、西ドイツ製のティール社が点字ラインプリンター「BETA-X3」をデモンストレーションしていた。このプリンターの印字速度の速さ・静かさに驚かされ、これを必ず輸入しようと思っしやっていたことを覚えている。それはさほど時を置かずに実現し、現在でも主力ではないながらも稼働している。

この会議の一環として、マールブルクにある「BLISTA」（ブリスタ：Deutsche Blindenstudienanstalt = ドイツ盲人教育施設）を見学した。広大な敷地に盲学校、点字出版所、点字図書館、録音図書館を併設した総合施設である。印象深かったのは、コンピュータ化が進んでいたことだ。私が仕事柄強く興味を引かれたのは、自動点字製版機と輪転式点字印刷機だった。製版機の点字印字速度の速さに驚嘆した。当時日点

では、前述の自動点字製版機の実験機を完成していた。実験機の段階で、自動反転が実現していたが、製版速度は速いとは言えず、表裏1枚製版するのに6分ぐらいかかっていた。ブリスタを見学した翌日、イギリスの参加者と昼食を共にしたとき、直居先生がそのことを話すと、「それは速い。昨日見た自動製版機は、裏面を打つにはまたセットしなければならず、結局1枚表裏を打つにはそれ以上かかる」とおっしゃっていた。輪転式点字印刷機は、そのスピードが驚異的だった。しかし、場所を取ることと、セットに時間がかかるためかなりの大量部数でなければ印刷スピードの利点を生かせないこと、丁合が必要なことなどから、日点の点字出版には向かないとも思った。この輪転式点字印刷機は、現在、点字毎日で駆動しているものと基本的には同じものであろう。

この会議が終わったあと、IFLA 国際会議が始まるまでの空白期間を有効に活用するために、あらかじめ先生が見学を予約していた「オランダ盲人図書館」(NBB)を訪れた。同図書館のあるハーグへ行くには鉄道を利用した。ユーレイルパスを購入していたから、特急にも1等車にも乗り放題の快適な旅だった。ライン川にずっと沿って走る風景は特に印象的だった。例のローレライ伝説の崖にはカタカナで「ローレライ」と書いてあった！先生は、何年か前にライン下りをした思い出を話してくださったものだ。



オランダへ向かう列車の中で

NBB では、点字・録音図書の製作からリクエスト・貸し出しまでかなりの部分でコンピュータ化されているのに驚嘆した。多分「ブリスタ」以上であっただろう。リクエストや貸し出しも既にメールで可能だった。読者への郵送用宛名ラベルもコンピュータ印刷だった。先生は「これを日点の将来の姿にしよう」とおっしゃっていた。そうした中で、点字教科書は職員がパーキンスブレイラーで点字化していたこと、日本製の立体コピー機を活用していたことが印象に残っている。

もうひとつの出張目的である IFLA の国際会議に参加するためにドイツに戻った。この会議には、^{みのお}箕面市立第二中学校の全盲の英語教師^{たかだつよし}高田剛氏と国立国会図書館の^{ししどともひさ}宋戸伴久氏も加わった。この大会から盲人図書館の部門が独立して SLB (Section of Libraries for the Blind) となり、Expert Meeting (専門家会議) が本大会に先立って、

8月17日～20日にマールブルクの「ブリスタ」で行われた。この時点で、1986（昭和61）年に IFLA の大会そのものは東京で行うことが決まっていたようだが、SLB 専門家会議も東京で行うようにと、直居先生や高田氏が強く主張され、オーストラリアの参加者も応援してくれた。しかし、欧州主体の SLB としては、日本はあまりにも遠くて行きにくいという雰囲気が濃厚だったことを覚えている。これについては、翌々年の IFLA シカゴ大会で、直居先生と東京大学総合図書館の河村宏氏（IFLA には'81年頃から関わっていた）が中心となって、それを実現させたのだった。

22日～27日、ミュンヘンで IFLA の大会が開催されたが、会議の詳細についてはもう覚えていない。

話は逸れるが、ミュンヘンには元日点職員の竹内妙子さんが在住していた。もちろん事前に連絡を取っていて、ミュンヘンでの夜はすべて彼女が仕切ってくれた。IFLA 参加者の日本人4人を毎夜、違ったレストランやビアホールに案内してくれた。ドイツの地ビールは、ミュンヘン市内ですら店毎に味が違っていた。先生と私はリッター（1リットル）ジョッキを少なくとも2杯は飲みほしていたと思う。ドイツといえばビールだし、聖書会議でも SLB でも一緒だった「ブリスタ」のヴィッテ氏から何かの機会に「蒸留酒は毒だ。飲むなら醸造酒だ」と言われたのをけっこう真に受けて、専らビールかワインを飲んでいたものだ。

1981（昭和56）年来日されて直居先生と面識のあった、ミュンヘン大学教授のショラー博士のご自宅を前述の竹内さんと共に訪問し、とても歓待されたこと、広い敷地の中に日本風の庭園があったことも思い出す。このときの話題で、モーゼルワインがとてもうまいと直居先生がおっしゃったことに対して、博士がフランケンワインはもっとうまいとおっしゃっていた。その翌日、私たちの部屋に博士からそのフランケンワインが届いたことに感激したものだ。

IFLA 大会の中間日あたりに、観光ツアーが組まれていた。いくつかのコースがあったのだが、先生も私も音楽好きだから、ワーグナーゆかりのバイロイト・コースを第1希望にしたが、希望者が多かったせいか抽選に外れてしまった。ほかのコースは気乗りがせず、せっかくユーレイルパスを持っているのだから列車を使わない手はないと、先生と相談がまとまった。時刻表を調べてみると、効率的に1日で往復できるのは、オーストリアを越えイタリア国境を過ぎた辺りまでということがわかった。当日朝、ミュンヘンを発ち、快適な列車の旅を楽しみながら、昼頃イタリア国境を越えたあたりにある小さな駅（名前が思い出せない）に降り立った。駅を降りるとバザー

大会か何かを開催しているのが目に入った。列車内で軽食を食べていたこともあり、先生に「昼食前に見てみましょう」とお誘いした。そこでは、日常雑貨から骨董品らしきものまでいろいろなものがあった。いろいろ物色しているうちに時間が経ち、2時を過ぎた。それでは、これから昼食を食べようとレストランに入ったのだが、店員に英語が通じない。イタリア語とドイツ語しか通じないことがどうやらわかり、「Have you something to eat?」を私がたまたま知っていたドイツ語の単語にそのまま置き換えて「ハーベン・ジー・エトバス・ツー・エッセン?」と言ってみた。これが意外にも通じたが（先生抜きで会話できたのは、ほとんどこのときだけ）、答は「Nicht」であった。仕方なくワインだけ飲んだ。どうやら食べ物を出す時間は12時から14時までに決まっていたらしい。この町を歩き回ってみたが、すべてそうであるらしい。帰りの列車の中で何か食べられるだろうと思ったのだが、乗り込んだ列車には食堂車がなく、ミュンヘンに着くまで確かコーヒーを飲んだだけだった。多分7時過ぎ頃ミュンヘンに着いて直ぐに目に付いたレストランで食事をしたことは言うまでもない。

ミュンヘンでのいつの日のことだったか記憶にないが、市内の大きな川の橋を歩いているとき、ふと遠方に目をやると、水浴びをしている集団がいた。その年のヨーロッパは記録的な猛暑であったので、当たり前のことなのだろうが、よく目を凝らすとどうも男女共に何も着ていないようなのだ。どっきり半分、うれしさ半分で、そのことを先生に申し上げると、印象に残ったようで、後日、東京ヘレン・ケラー協会発行の「点字ジャーナル」の聖書会議と IFLA 大会の報告記事の中にそのこともエピソードとして書いておられた。

IFLA 大会終了後、列車でザルツブルクに途中下車して散策し、ウィーンまで行き、1日観光を楽しんだ。ウィーンでは、高田氏・宍戸氏ともまた行動を共にした。その間のエピソードもあるのだが、長くなるので、はしよることにする。

ともかく、直居先生と文字通り寝食を共にした3週間で、一番の思い出となっている。このときの先生は現在の私よりはるかに若かったのだが、体力に気を遣っておられたようで、朝起きると必ず体操と腕立て伏せをしておられた。朝にまるで弱い私は、ベッドの中からぼんやりとそれを眺めていたものだ。

日点委事務局長として

長く日点委の事務局長を務めてこられた下沢^{まさし}仁先生が、1991(平成3)年3月末に日点を退職すると共に、日点委事務局長もお辞めになるという意思表示をされたのは、

その前年の秋頃のことだったと思う。問題は、その後任である。日点委の何人かで話し合いを持ったが、直居先生のお名前が候補に上がった。そのとき、下沢先生が「直居さんは受けないと思うよ」とおっしゃった。その理由は明らかにしなかったのだが、直居先生が下沢先生と同じ時期に日点を退職なさる意思があることを下沢先生はご存じだったのだろう。それでもお引き受けくださったのだ。あえて火中の栗を拾おうとする先生の性格（運命？）からだったかもしれない（後に国際視覚障害者援護協会の理事長を引き受けられたときもそうだったようだ）。そうして、1990(平成2)年11月2日の日点委第26回総会で、阿佐会長、直居事務局長が互選され、第6期の新体制がスタートした。

それまで日点委の図書や雑誌の発送業務などは、下沢夫人幸子^{ゆきこ}氏が一手に処理されていた。下沢先生退職後、その業務は、事務局員である私に引き継がれなければならないわけだが、日点の職員でもある私にはとてもこなし切れないことは確かだった。そのことを直居先生は理解していて、日点在職中に、図書については日点用具部が発送業務を請け負うように調整してくださった。

先生が1991(平成3)年3月末に日点を退職なさってから、事務局長としての仕事をこなされていた。盲界を常に見渡していて、日点委の事業報告には、それに基づく内容を前文としてお書きになっていた。時に苦言を呈することもあった。そんな一例として、2001(平成13)年度の事業報告を引用する。

点字に対する社会的関心は驚くほど高まっている。(中略)点字の存在に対する認識が社会的に広まることは喜ぶべきことである。しかし、このような傾向に便乗して、「点訳によって在宅で容易に収入を得られる」として、会員を募集したり、小学生を対象とする「児童点字検定」と「ビジネス点字検定」を行うために、「児童点字検定三級公式テキスト」「ビジネス点字検定三級公式テキスト」として、誤りと言うよりは、批判の対象にもならない点字表記を掲載した図書を販売して受験者を募集するなど、悪徳商法と言わざるを得ないようなことが行われている。退廃し、腐敗した社会現象として傍観してはいられない。正しい点字の普及を目指す当委員会は、とりわけ、せっかく点字に興味を持ち、熱心に点字を学習しようとする純粋な児童に、このようなテキストによって指導されることの、あまりにも大きな弊害を傍観することはできない。このようなことに対して、積極的な行動を起こさなければならない。

先生がこの実施者に直接抗議したことは言うまでもない。もちろん、この「点字検定」なるものは、日盲社協が2001(平成13)年から実施している「点字技能検定試験」とは何の関係もない。

おわりに

日点委の関東地区などに居住している関係者がほとんど月1回、土曜日に日点で集会（誰でも参加自由）を持っていて、事務局会としての役割もある。直居先生は、事務局長を退任されてからも体調を崩されるまではほとんど参加されていた。その真面目な会のあと、有志が二次会と称して飲み食いし、点字の話も含めて自由に歓談するのだが、それにもほぼ必ず参加しておられた。そのときの話題は、実に幅が広い。先生と私の共通の趣味である競馬の話もよくしたものだ（儲かったという話はあまり伺った記憶がないが）。

先生は日点の初代副館長であり、日点委の3代目事務局長であったが、私は日点の3代目副館長、日点委の4代目事務局長になった。先生と寝食を共にした3週間の海外出張の思い出と併せて、こんなところにもご縁を感じている。

（注：名称や肩書などはすべて当時のものを使ったつもりだが、記憶違いもあるかもしれない。直居先生にお聞きできればと、思うことしきりである）

「日本点字表記法」のあり方について

日本点字委員会事務局

1. 「日本の点字」に意見を紹介

『日本点字表記法 2001年版』が発行されて10年が経過した。日点委総会では、ここ数年、各地の点字研究会から「表記法」の見直しや具体的な変更案が提案されている。議論の結果、部分的な変更が決定されているが、その反面、「表記法」の規則が細部にわたることへの疑問の声も上がり始めている。

そこで「日本の点字」第35号では、点字表記の具体的な規則についてではなく、「日本点字表記法のあり方」について広く意見を求め、寄せられた15名の意見を特集として掲載した。

その結果、今回原稿を寄せられた方の多くが、現行の表記法について、見直す点があると指摘した。また表記法の構成と他の資料の関係を整理することについて、分かれ書きと切れ続きの検討について、複数の方から提案があった（内容については、「日本の点字」第35号 [2011年3月26日発行] 参照）。

2. 「点字表記法」あり方検討委員会の発足、および「答申」の報告

日本点字委員会研究協議会並びに第47回総会（2011年6月4日・5日、於・日本ライthouse情報文化センター）において、この件がとりあげられた。その際、「今回原稿を寄せた方の多くが、表記法の構成と他の資料との関係を整理すること、分かれ書きと切れ続きについて検討すること、など現行の表記法に見直す点があると言っておられる。ご意見をさらに検討するために、表記法のあり方を検討する新たな委員会を立ち上げるとどうか」といった発言があった。

討議の結果、下記のとおり承認された。

「日本点字表記法のあり方」検討に関する特別委員会の設置について

1. 諮問内容

「日本の点字」第35号特集に寄せられた意見、今総会で出された意見を基に次の項目について検討し、次回総会に答申する。

(1) 日本語の点字表記の「日本点字表記法」での位置づけについて（符号類も含まれ

る)

(2) 専門分野の点字表記の「日本点字表記法」での位置づけについて

(3) 書き方の形式等の「日本点字表記法」での位置づけについて

(4) 墨字書の点字化の扱いについて

(5) 「参考」の扱いについて

2. 委員会 (略)

3. 設置期間

今総会から次回総会まで。

後日、加藤俊和、加藤三保子、金子昭、福井哲也、藤野克己、宮村健二、渡辺昭一の各委員が、会長より「日本点字表記法のあり方」検討委員を委嘱された。

同委員会は3回にわたる会議を経て、2012年4月30日付で、日本点字委員会会長に答申した。その全文は下記のとおりである。

3. 答申内容

2012年4月30日

日本点字委員会

会長 木塚 泰弘 様

「点字表記法」あり方検討委員会

「日本点字表記法」のあり方について (答申)

日本点字委員会第47回総会で諮問された「日本点字表記法のあり方」について、当委員会で検討した結果を、以下のように答申します。

I 諮問内容

「日本の点字第35号」特集に寄せられた意見、今総会で出された意見を基に次の項目について検討し、次回総会に答申する。

(1) 日本語の点字表記の「日本点字表記法」での位置づけについて

- (2) 専門分野の点字表記の「日本点字表記法」での位置づけについて
- (3) 書き方の形式等の「日本点字表記法」での位置づけについて
- (4) 墨字書の点訳の扱いについて
- (5) 「参考」の扱いについて

II 答申内容

※ 書名等を以下のように略記した。

「表記法」：「日本点字表記法」全般

「現代語篇」：『日本点字表記法 現代語篇』

「改訂表記法」：『改訂日本点字表記法』

「1990年版」：『日本点字表記法 1990年版』

「2001年版」：『日本点字表記法 2001年版』

日点委：日本点字委員会

※ 答申を補足する意見を「補足意見」、答申とは異なる意見を「参考意見」として記した。また、具体的例示や「表記法」の掲載箇所を示す場合は「例」として記した。

はじめに — 「表記法」の役割について —

当委員会は、「表記法」の果たす役割について以下のように考えた。

「表記法」は、日点委が定める「点字正書法」である。

1971年「現代語篇」発行以来、日点委は、「現代仮名遣い」「外来語表記」など日本語の語の書き表し方の変化や、委員を中心とした各地域委員会での研究成果による規則の見直し、中途視覚障害者の増加など社会の変化により、3度「表記法」の改訂を行い、「表記法」の規則の充実を目指して歩みを進めてきた。このような歴史に基づき、今後は、点字表記の正書法として、より一層安定的かつ高い整合性のある「表記法」を目指すべきと思われる。

加えて、研究成果に基づく小規模な規則の変更や用例の修正などは、別冊子として発行したり、「日本の点字」やホームページで公表するなど柔軟に対処し、実行していくことも求められる。

学校教育の場や点字図書館、点字出版所など、各分野でのガイドラインは、「表記法」が示す基本原則に基づき、視覚障害者の教育並びに情報提供等に携わる機関・専門家の手により編まれることを期待し、日点委はそれらが「表記法」の基本原則に則しているかを見守る役割を果たすことを願う。

「表記法」は、点字に係わる全ての人を対象として編まれるが、初学者が点字を学ぶための役割までは求められない。その役割は、専門家により発行される「入門書」に期待する。

以下、各項目について、答申する。

1. 諮問1について

《諮問1》日本語の点字表記の「日本点字表記法」での位置づけについて

点字仮名・数字・アルファベットの書き表し方、分ち書き・切れ続き、表記符号の構成と用法について、「2001年版」の各章ごとに検討を行った。その結果、「2001年版」第1章～第4章の各章に以下の課題が認められた。

なお、「2001年版」の規則について逐条審議を行ってはいないことを付記する。

(1) 第1章

本章は、点字記号の構成を示す章であるが、「2001年版」には、表記符号の用法に関する注意も記されている。このことについて、用法の記述は、第4章にまとめた方がよいという意見と、表記符号の誤った用い方を防ぐには、本章でも注意を喚起しておく方がよいという意見が出された。

補足意見

1：本章に用法についての記述があると、本章を見ただけで、符号の用法を十分理解せず、誤った用い方をする恐れがある。

例：発音記号符など（第3節3.）、伏せ字とマーク類の符号（第4節4.）

2：「1990年版」で「付加記号」として分類した記号類は定着したが、用法に注意するように徹底する必要がある。特に、伏せ文字符号の使い方には課題が多い。

3：墨字の点字化に際して、記号の形への対応だけで用いることのないように、「表

記法」で明確に記さなくてはならない。

4：本章の最初に、「本章では点字記号の構成を示している。語の書き表し方については第2章で、表記符号の用法については第4章でそれぞれ記述する」旨の記載をしてはどうか。

(2) 第2章

本章は、日本文の中に点字仮名・数字・アルファベットなどをどのように書き表すかについて示す章であるが、第1節・第2節の仮名遣いについては、現行規則の課題は挙げられなかった。数字やアルファベットなどを用いた語の書き表し方について、以下の課題が認められた。

【課題1】

本章での、外国語引用符・情報処理用点字・発音記号符の扱い方に課題がある。

例1：発音記号符は、本章からは、外した方がよい。

例2：情報処理用点字のうち、ホームページやEメールアドレスの書き方は必要である。

【課題2】

外字符と外国語引用符の使い分けに課題がある。

例1：外字符で書き表すことができる用例の追加・変更（第47回総会提案事項）を検討する必要がある。

例2：一続きに書き表すべき1語中に外国語引用符を用いた場合、フルスペルで書くかどうかについても課題がある。

(3) 第3章

本章は、分かち書きと切れ続きについて述べている。

分かち書きと切れ続きの関係についても検討を要するという参考意見もあったが、自立語や固有名詞内部の切れ続きについて、以下の課題が認められた。

【課題1】

本章には、日本語の文法に関する用語が多用されるが、その中に定義が理解されに

くい用語が認められる。用語の選択についても十分検討し、用語の定義を明らかにした上で、規則を記述することが必要である。

例：造語要素

【課題 2】

本章第 2 節では、自立語内部の切れ続きを判断するために「拍数」と「自立可能な意味の成分」という二つの要素を用いて規則を構成しているが、その捉え方や解釈に幅が生じていると指摘する意見があった。日本語の特性から、この節の規則の解釈や判断は分かれるところであり、どのような規則を定めても、切れ続きに幅が生じることは避けられないが、「2001年版」の規則構成や文章表現・用例の再検討も必要である。

例 1：「改訂表記法」の「注意」では、「交響楽団、生徒会長のように切らずに書き表す場合と、点字□用紙、建築□業界のように切って書いてよい場合とがある」となっていた。「1990年版」は、本則に「経済学者、会計課長、結婚式場」などが切るという例にある。「図書館長」は、続けるとも切るとも言っていない。その境目が曖昧である。

例 2：「車椅子」「頭文字」なども、区切るか、一続きに書くか、意見が分かれる言葉である。

【課題 3】

「2001年版」では、切れ続きの判断基準として語種に言及していない。しかし、日本語は、漢語・和語・外来語で構成されており、自立性の判断の目安として語種を避けては通れないとの見方がある。本則には入れないまでも、「補足」「備考」などに、切れ続きの判断の目安として語種を採用することは検討課題である。

補足意見

- 1：意味が副次的か自立しているか、要素間の関係で判断しようとしても分かりにくい。「表記法」の規則にはなくても、これまでも語種に頼って判断してきた事実がある。
- 2：視覚障害者に語種の区別（特に和語と漢語）は困難との意見もあるが、語種以外にも、助詞・助動詞など、分かりにくいことは多い。視覚障害者に分かりにくいからという理由で排除しては、点字の規則は書けないし、分かりやすい「表記

法」にはならない。

参考意見

- 1：造語要素・接頭語・接尾語の問題との関連などで語種に触れるのは必要かもしれないが、語種を基準にしてのルール作りは、これまでの日点委の方向とは相反する。新たにそれを持ち出す必要はない。

(4) 第4章

【課題1】

表記符号の用法について、過去の総会（第44回～第46回総会）で提案され、議論してきたことを検討しなければならない。特に、カギ類、カッコ類、伏せ文字符号などについてである。

【課題2】

一般文章中の書き表し方とは体系の異なるものについて、第2章と第4章でどのように扱うか、その範囲の棲み分けが課題である。

例1：外国語引用符については第2章でも第4章でも扱う必要がある。

例2：発音記号符、情報処理用点字記号、単位の書き方などはどうするか。

2. 諮問2について

《諮問2》専門分野の点字表記の「日本点字表記法」での位置づけについて

「表記法」で言う専門分野は、以下のように二つに分類できることを確認した上で、検討を行った。

A. 点字仮名体系と異なる体系を持つ分野・・・数学、理科、英語(外国語)、楽譜、情報処理

B. 点字仮名体系の中にあるが、内容が専門的な分野・・・古文、漢文、医学用語、試験問題

(1) 「表記法」に専門分野の解説を掲載するか、別冊を発行する方がよいかについて検討を行った。

- ① 記号体系が異なる数学・理科は、別冊（「点字数学記号解説」「点字理科記号解

説) でよい。

② 情報処理用点字記号については、URLやEメールアドレスの書き方は、「表記法」に載せる。情報処理技術者にとって必要な専門的内容は紙数が少なくとも別冊にするのがよい。

③ 医学用語は、「表記法」第2章・第3章と異なる記号体系を持つわけではないが、学校の教育や職業にも係わる専門的な分野であり、特殊な用語や一般書にはない切れ続きの規則も含まれるので、別冊で扱うべきである。

④ 試験問題についても、現在の別冊（「試験問題の点字表記」）の形でよい。

⑤ 古文・漢文は、「表記法」で扱うかどうか検討を要する。

なお、現在、日点委として扱っていない外国語と楽譜については、世界の動向から見ても、現状では日点委としての方向を示すのは難しいし、適当な時期ではない。当分の間、新しい情報や動きについて、できるだけホームページで情報提供をしていくのがよいとの認識で一致した。

(2) 一般文章中に専門分野の表現がある場合の処理について、「表記法」にどのように記述するかを検討した。

専門分野の表現が、段落を別にして出てくる場合と文中に出てくる場合がある。「表記法」第4章では、あくまで文中でどう書くかに止めておいた方がよいのではないかと。段落を含む場合は、専門分野の記述に委ねる方がよい。

理科記号の中の単位や、情報処理用点字記号のURL・Eメールの書き方は、「表記法」で扱う必要がある。

専門分野の内容であっても、あえて体系変換を行わず、仮名書きするようなケースも紹介する必要がある。

「2001年版」では専門書の範囲に入りそうな用例も見られるので、用例の検討が必要である。

3. 諮問3について

《諮問3》書き方の形式等の「日本点字表記法」での位置づけについて

「2001年版」第5章にある「書き方の形式」については、原則はあるものの、ある程度書き表し方に幅のあるところであるから、原則を示しながら、例示については内

容を精査し、よりよい例を入れるようにしなければならない。

補足意見：これまで提案され総会（第45回～第47回）において議論されている事項については、検討課題である。

例1：図や表の書き方は、ある程度示唆がなくてはいけない。

例2：領収書の例などは、なくてもよいかもしれない。

4. 諮問4について

《諮問4》墨字書の点訳の扱いについて

墨字書の点訳の扱いは重要なポイントであるので、「表記法」でガイドラインを示すべきである。しかし、元となる墨字書、対象とする読者、点訳の目的等はさまざまであるので、「表記法」でそれら具体的ケースに言及することは實際上困難である。

「表記法」では点訳全般を包括する基本原則を示すこととする。

「2001年版」第5章第4節「点字化のための配慮」については、その原則や心構え、注意点を述べるに止める。「2001年版」では、第4章「表記符号の用法」や第5章第2節「表や略記など」で述べる部分との重複や混乱が生じている。この項目は必要だが、中身を精査しなければならない。

例：「中点の扱い」（第5章第4節4.）

5. 諮問5について

《諮問5》「参考」の扱いについて

「日本点字委員会の役割と本書の活用の仕方」「点字の表記に関するキーワードの解説」、参考資料について、「表記法」に盛り込むものとホームページに移せるものとを整理する必要がある。

例1：「キーワード解説」は、規則に「注意」と「備考」ができれば、そちらで補うことができる。ただ、「表記法」の中で、原則を他との関連を含めて体系的に説明をしているという役割がある。全体的な理解の上では必要である。

例2：点字の意義・役割については、「まえがき」や「発刊に当たって」に書くべきである。

例3：点字の歴史については、他書に譲り「表記法」に付けなくてよい。

例4：委員名はホームページで補える。

例5：用語の定義は、用語を明確化する意味で、必要である。

例6：記号一覧については複数の異なる意見があった。

- ・簡便に確認できるので便利である。記号一覧はあった方がよい。
- ・記号一覧は、便利である反面、危険性もある。記号一覧で欲しいのは、一般文章中に出てくるものだけではないか。それ以外は用法や注意を補わないと間違った使われ方をする恐れがある。例えば、発音記号符、算数記号がそうである。

6. その他の課題について

諮問事項のほか、「日本の点字 第35号」に掲載された意見についても検討を行った。

(1) 「表記法」の規則の構成について。

「2001年版」は「規則」と「注意」の2本立てとなっているが、「規則」以外はすべて「注意」としてまとめてしまう書き方には課題がある。

「現代語篇」の「注意」「備考」「例外」、「改訂表記法」の「注意」「備考」「許容」などの経過を踏まえ、「規則」「例外」「許容（「限定された許容」があるかどうか）」「注意（このような間違いをしないように注意しましょう）」「備考（補足説明、規則の背景や意味の説明）」といったまとめ方が考えられる。「注意」や「備考」は規則の近くにあった方が分かりやすく整理がしやすいと思われる。

補足意見

- 1：「規則」と「例外」と「許容」があるのは明確になるが、その分類は難しいかもしれない。
- 2：必ずしもすべての「規則」に「注意」や「備考」があるわけではないが、理解しやすい。「規則」と「許容」、「例外」と分けることによって、分かりやすくなる。「許容」や「例外」があることによって、規則に弾力性が出てくる。

(2) 墨字書・点字書としての体裁について。

過去の「表記法」は、点字版・墨字版ともにレイアウトに課題があった。墨字版・点字版の内容は同じでも、それぞれの読みやすさを考慮しなければならない。

墨字版は、文字の大きさや、太字、強調などの仕方に配慮する必要がある。

点字版についても見出しの立て方や例の書き方に工夫が必要である。

点字版には対応する墨字の説明がないために、規則の理解しやすさに難があるのではないか。整備の必要がある。

(3)「2001年版」以降決定した規則の改定の扱い方について。

すでに合意を得ている「漢字や仮名で書き表された単位の書き方」については、「表記法」が改訂される際に、規則に入れることが必要である。

今後、規則の修正などがあった場合は、「日本の点字」やホームページを活用して周知を図ったり、必要に応じて、冊子の形で発行するなど、迅速で、柔軟な対応が求められる。

まとめ

当委員会は、第47回総会で付託された諮問事項について審議した結果、「2001年版」には、ここに述べたような多くの課題があることを確認した。これらの課題を解決し、よりよい「表記法」とするために、「表記法」改訂のための編集委員会を立ち上げる必要があるという認識で一致した。

Ⅲ 委員（五十音順）

加藤俊和、加藤三保子、金子昭、福井哲也、藤野克己、宮村健二、渡辺昭一

Ⅳ 経過

第1回会議

日時： 2011年8月7日（日）13:00～17:00

会場： 新大阪丸ビル本館 A312号室

大阪市東淀川区東中島1-18-5

電話 06-6321-1516

出席者：委員全員（木塚会長同席）

内容：「表記法」についてフリートーキング

第2回会議

日時： 2011年10月30日（日）13:00～17:00

会場： 新大阪丸ビル本館 A310号室

出席者：委員全員（木塚会長同席）

内容：第1回会議で委員から出された「表記法」の課題についての検討

第3回会議

日時： 2012年2月12日（日）13:00～17:00

会場： 新大阪丸ビル本館 A310号室

出席者：委員全員（木塚会長同席）

内容：答申内容決定のための討議

4. あり方検討委員会の答申を受けて

日本点字委員会研究協議会並びに第48回総会（2012年6月2日・3日、於・横浜あゆみ荘）においてあり方検討委員会の答申を受けて協議を行い、下記のとおり承認された。《①『日本点字表記法』検討委員会」を発足させる。委員会の任務は、「あり方検討委員会」の答申を受けて、その中に示されている課題を中心に、その内容、及び解決策について検討する。検討の期間については、2年を目途とする。途中経過を総会に報告する。「検討の過程において、会員、事務局員、会友に可能な限り情報提供して、意見の集約に努める」旨の要望があった。②委員の選任については、事務局会に付託する》

後日、岩屋芳夫、加藤俊和、加藤三保子、金子昭、木塚泰弘、白井康晴、田中徹二、当山啓、福井哲也、藤野克己、水谷吉文、宮村健二、渡辺昭一（50音順）の13名の委員が会長より委員を委嘱された。同委員会は、2012年10月7日、第1回会合を開き、その活動を開始した。

特別講演会「英国における国際統一 英語点字の導入過程とその課題」報告

日本点字委員会では、ピート・オズボン (Pete Osborne) 氏による講演会「英国における国際統一英語点字の導入過程とその課題」を開催しました。日時・2012年5月20日(日)午後1時30分～4時30分、会場・カトリック女子修道会幼きイエス会(ニコラ・バレ)でした。通訳・田畑美智子氏。

当日の講演から、統一英語点字 (Unified English Braille. 以下 UEB と略記) についての説明と、イギリスにおける導入過程の部分を記します。

英語は世界に一つだけである。しかし「色」はイギリスでは“colour”と綴り、アメリカでは“color”と綴るようなちょっとした違いはある。アクセントも地方やイギリス、アメリカにおいても異なる。このような英語内部の違いは、点字においても見ることができ、アメリカ式とイギリス式では微妙に異なる。その違いの多くは、一般の文章よりも、科学技術・数学など専門分野の点字表記に現れる。ご存じのように、ネメス・コード (Nemeth Code) とイギリスの科学などの点字表記は大きく異なる。

このようなことから、国際的に統一された英語点字表記が可能なのか、という問題が起こってきた。楽譜の点字表記は難しいものであるが、国際的に統一されているといえる。国際的に統一された点字楽譜の経験を生かしていくべきである。ただ点字楽譜はまだ不十分なところがあり、特に東洋の音楽の表記については課題が残っている。また発音記号が統一されていることも、国際的に統一されている点字表記の例としてあげることができる。

点字表記改訂の必要性について話す。なぜ必要性について語るのか。イギリスでもほかの国でも、点字はすでに完成されているのに、なぜまた変えなければいけないのか、という質問をよく受けるからである。私はいつも、「社会の変化に呼応して変えることが必要なのだ」と答えている。統一はコスト削減につながる。コスト削減の話は気持ちのよいものではないが、最近の経済状況を考えると、考慮せざるを得ない課題である。例えばイギリスとアメリカにそれぞれの点字規則を定める機関があるが、別個に運営するだけでもコストがかかる。国際的に統一されたものがあれば大いに助かる。点字も国際化の波から逃れることはできないのである。

イギリスとアメリカが同じ点字の規則を用いれば、作製された資料は共有することができ、国ごとにルールブック、教材、資料を用意する必要はない。今の経済状況において、それぞれの国で異なる点字表記の規則を維持していけるとは思えない。

しかし人々は変化を嫌う。例えば今ここで皆さんに、「座席を変えてください」とお願いしたら、皆さんは「いやだなあ」と思うのではないか。変化に拒否反応を示すのはふつうで、変化を無視するか、変化させないようにするか、どちらかの反応を示すものである。点字使用者は慣れ親しんだ「自分の」コードを守ろうとする。そこで変化を起こすには、強いリーダーシップと丁寧な説明が必要となる。

イギリスでは点字表記の規則を変更することほど、視覚障害者をエキサイトさせるものはない。イギリスで大文字を使用し始めたときも、大反対にあった。英国盲人協会の周りで視覚障害者が人間の鎖をつくってスローガンを叫んだり、歌を歌ったり、私たちに罵声を浴びせたりした。イギリスで UEB を導入する過程においても、相当の反応があった。

UEB について説明したい。この開発には20年以上の時間と想像以上の労力を要した。発案したのはアメリカである。皮肉な話だが、UEB を採用するのが最も大変なのは、当のアメリカであろう。

UEB の大原則は、「一つの記号に一つの意味を持たせる」ということで、あいまいさを残さないということである。一つの例をあげる。“UN” という語が出てきた。表記は“U.N”であった。ピリオドは“dd”であるから、“UddN”と変換された。これはささいな例に思われるかもしれないが、最近では文章の途中にピリオドなどのパンクチュエーション・マークを使うことが多いので、この問題は重要である。その問題を解決するには、「こういう文脈の場合はこう変換する」という膨大なリストが必要になる。議論の末、あいまいさを取り除き、統一性を保つという視点から、低下略字を使わないことになった。「一つの記号に一つの意味」という大原則からも、この結論は重要であった。

UEB は一般の文章だけでなく、数学や化学など技術的な文章にも適用される。そのため、×、÷、%などの記号は、一般の文章においても数学の本を読んでも同じ記号が使われることになる。読者にとっては読みやすくなるのではないかと思う。

UEB では、イタリックなど墨字のさまざまな表記もそのまま表記できるようになっている。現在の表記規則では、太字でアンダーラインのあるような墨字を点字では表現できないが、これからは、特に教育の場で墨字をそのまま点字で表現する必要がある

増してくる。UEB によってこのことは可能になるが、リスクもまた存在する。墨字の持つ要素をすべて点字に反映させると、多くの記号が必要となり、読みにくくなってしまう。そこまで墨字を忠実に再現してもらわなくてもよい、と思う読み手もいる。そのために、読み手のニーズに合った点字を製作する必要性が出てくる。

イギリスではどのような道のりをたどって、UEB を導入するに至ったのか。

国際英語点字協議会 (ICEB) は、イギリス、カナダ、ニュージーランド、オーストラリア、アメリカ、ナイジェリア、南アフリカの7カ国が加盟国となっている。UEB はすでに完成されたものであり、国際英語点字協議会が UEB を管轄し、更新を行っている。UEB の導入を最も早く検討し始めたのは、イギリスであった。2008年、英国点字委員会 (BAUK) は4,000人以上の点字使用者、製作者など関係者に UEB のサンプルとアンケート用紙を送付した。470人からアンケートの回答があった。回答者の76%が UEB の導入に反対で、24%が賛成であった。サンプルを送った残りの89%からは何の反応もなかった。この結果を受けて、そのときは UEB を採用しないこととした。英国点字委員会は、その後ほかの二つの組織と合併して、英国アクセシブル・フォーマット協会 (UKAAF) となり、点字に限らずあらゆるフォーマットの開発にかかわることになった。

同協会の委員長として、私は UEB の評価に関するプロジェクトを立ち上げた。イギリスにおける教育と社会の変化を考慮して、UEB の採用に向けて再度検討する必要があるのではないか、と考えたからである。パソコンのソフト開発などにもお金がかかるので、イギリスだけで表記規則の変更を進めていくのは不可能であった。

さきほど点訳するときのあいまいさの例をあげたが、この問題を何としても私たちの国で解決したいと思った。アンケートに答えてくれた11%の意見だけで結論を出すのはフェアではない、回答のなかった89%の意向を知りたいと思った。

6か月後に結論を出すことを目指して、新たなプロジェクトをスタートさせた。このプロジェクトを立ち上げたことは、強いリーダーシップを意味しているのか、愚かなことをしているだけなのかは、分からない。時間が経てば分かることである。

調査にあたっては、より広い分野の人たちに UEB のサンプルを送った。ただ回答を送り返してもらっただけではなく、すべての人に電話して、皆さんの意見を聞くように努めた。UEB が技術的な文書においても使用に耐えうるのか、専門家の意見を聞いた。学校の先生がたや点訳者にも、UEB を採用した場合の影響について調査した。ほかの英語圏での UEB 採用状況も調査し、参考にした。

調査報告が英国アクセシブル・フォーマット協会の理事会に提出された。白熱した議論を経て、理事会において UEB の採用が承認された。2011年10月のことであった。これからはこの決定に従って UEB を導入していかなければならない。現在、イギリス全土で導入するためのプランを立てている。

ほかの英語圏においても UEB の採用されることを期待している。

【解説】

本稿では割愛したが、上に採録した講演の前部分では、イギリスにおける教育や社会の変化について、後ろ部分では、点字の未来について、オズボン氏は語っておられた。

英語を使用している7か国が国際英語点字協議会（ICEB）を結成し、その中で UEB の導入を図っているが、アメリカ、イギリスの2か国だけが導入を決めていなかった。そのために、UEB 導入への関心が薄まっていたが、2011年10月にイギリスが正式にその導入を決定した。点字書製作や学校教育に及ぼす影響など時間をかけて検証し、検討を重ねて導入に踏み切った。残るアメリカが本格導入することになれば、世界の英語表記が変わり、わが国への影響も計り知れない。イギリスにおいて UEB 導入の中心的な役割を果たしたピート・オズボン氏が来日する機会を捉えて講演をお願いした。

オズボン氏は、英国盲人協会（RNIB）主任点字担当官、英国アクセシブル・フォーマット協会（UKAAF）議長など多くの組織で活躍しておられる。

従来の英語点字表記と UEB の主な相違点は、下記のとおりである。

- ①新たに追加される略語、略字、縮語はない。
- ②略字のうち、ble, com, dd, ation, ally, to, into, by, o'clock の9個が廃止される。
- ③マスあけについては、点字・墨字が同じように表せるようにする。したがって、and, for, of, the, with, a を互いに続けて書くことはしない。
- ④現在使われている残り180の略語、略字、縮語に変更はない。ただしいくつかの縮語の派生語については、使用法に制限が設けられている。
- ⑤一般文章、数式、コンピュータ・プログラムなど、どのような文脈においても、同じ墨字記号はいつも同じ点字記号で表す。例えば、小数点、文末のピリオド、点線

のいずれにおいても ⠠(②⑤⑥) の点が用いられる。

⑥丸カッコなど、従来開き符号と閉じ符号が同じものは、区別できる形とし、カッコ類・コーテーション類の形が整理され、改められる。

UEB の歴史：1992年、北米点字委員会 (BANA) は、一つの記号ですべての分野に適用できる点字コードを生み出すプロジェクトを発足させた (音楽は除く)。ほかの英語圏がこれに関心を持ち、1993年、国際英語点字協議会 (ICEB) が組織された。2004年、同協議会は、UEB が十分に完成されたコードであり、加盟各国は自国の点字コードとして採用できることとした。

2004年から2005年にかけて、オーストラリア、ニュージーランド、ナイジェリア、南アフリカが、2010年にはカナダが、2011年10月には、イギリスが採用を決定した。2012年11月、BANA が将来のアメリカの点字として UEB を採用することを決めた。しかしその移行は具体的にいつまでという期日は示されておらず、多くの意見を聞きながら、注意深く計画を立てて、今後に向けて実施される。また理数記号のためのネメス・コードは温存する、など全面的に導入ということではない。

日本との関係：わが国で UEB を採用するかどうかは、まだ将来のことと考えてよい。アメリカが導入を決めたが、その後のアメリカでの状況などを精査したのち、わが国で採用するかどうかの議論になると思われる。まず最初に導入するのは、英語の点字教科書であろう。

今回のオズボン氏の講演は、海外の点字状況を知るうえで貴重な学びの機会であった。オズボン氏、通訳の田畑美智子氏、その他この講演会のためにご協力いただいた方々にお礼申し上げたい。

(文責・金子 昭)

ホームページ開設から1年

日点委のホームページは、2011年9月1日オープン以来、1年が経過しました。この1年の動きをご報告します。

訪問者数・訪問者の傾向

2012年9月1日現在、ホームページトップ画面の訪問者数は13,631人でした。これは、このホームページ（HP）を訪問するとき、いわば正面玄関から訪れた方の数です。これとは別に、例えば「書籍・資料」のページを「お気に入り」に登録していて、まずそのページを訪れる方、または、他のサイトで「医学用語の点字表記について」などの資料紹介があり、リンクからすぐにダウンロードページを訪れた方など、すべての訪問者数をあわせると、27,651人になりました。毎日の訪問者は約70名と多少の増減はあるものの安定しています。これは決して少ない数ではありません。

訪問者がこのHPをどこで知って、どこからやってきたのかを知るのにリファラーという統計項目があります。日点委のHPを開く直前の住所を知る項目です。

直前に開いていたのが、google、yahoo、gooなどの検索サイトであれば、調べたい項目がどこにあるか分からず、例えば「医学用語の点字表記」と検索サイトで入力し、偶然にヒットし、このHPを訪れた訪問客が多いことを表します。

このHPの訪問客はそうではありません。検索サイトを經由して訪問する人はとても少ないのです。すでにリンク先を知っていて、確信を持って訪れる方が圧倒的に多いのです。固定客がコンスタントに見ているHPとすることができます。

そして、訪問した人が開くページの数平均2.2ページですから、「これが知りたい」「このデータをダウンロードしたい」と目的を持ってアクセスする方がほとんどと言えます。

ダウンロード数

このホームページの特徴として、日点委が発行する種々の資料をダウンロードできることが挙げられます。

現在、「日点委通信」17号～27号の点字版・墨字版、「日本の点字」点字版すべて、「日本の点字」墨字版のうち絶版になった1～8号、10号、14号、15号、26号、それ

に点字表記に関する資料として「医学用語の点字表記について」「数式等とともに用いられる句読点の用法の一部変更等について」「漢字やカナで書き表された単位の切れ続きについて」「表記符号について補足」の4種の資料、啓発資料として「点字を読んでみよう」のPDFデータがあります。

また、会員専用ページからは、総会議事録や今年度の研究協議会資料、事業報告・決算、事業計画・予算などがダウンロードできます。

今年度から「日本の点字」の点字版は、発行と同時に掲載することとなりました。

データダウンロードの状況を見ると、点字表記に関する資料への関心が高いことが分かります。特に「医学用語の点字表記について」の資料は、PDF版が4,000回以上ダウンロードされ、活用されています。

以下に、主な資料のダウンロード数をお知らせします（2012/09/01現在）。

資料名	B E S	P D F
医学用語の点字表記	514	4156
漢字や仮名で書かれた単位の切れ続き	133	326
表記符号の補足（記号間の優先順位）	116	301
数学記号（句読点の用法変更）	105	411
点字を読んでみよう		679
日点委通信 No. 27	134	1071
No. 26	132	472
日本の点字 第36号	67	
第35号	109	
第1号	104	157

English site

English site に注目してみますと、全訪問者の約3%の方が訪れています。

訪問者数は、日本と unknown が断然多いのですが、訪問者の多い順から並べてみると、Ukraine (1211)、Germany (226)、Russian Federation (214)、以下、China、Sweden、Australia、Malaysia、Seychelles、Brazil、Singapore、Hong Kong、Canada、Netherlands、Indonesia、United Kingdom、Switzerland、Poland、Italy、Samoa、Taiwan、Belgium、Romania、Moldova、Thailand、Virgin Islands (British)、Viet Nam と続きます。アクセス数はとも

あれ、これだけの国の方々が English site を読んでくださっていることを思うと、うれしくなります。特に、ウクライナ、ロシア、それにセイシェル（Seychelles）が特徴的です。unknown には多く米国が含まれるそうですが、私が知る他のHPと比較して、United States がないのはちょっと気になります。

今後、English site の更新も検討課題となると思います。

問い合わせメールについて

HPの問い合わせメールの利用は約40通でした。図書の注文が最も多いのですが、製品のパッケージに点字表示をするにはどのようにしたらよいかという業種団体担当者からの問い合わせもありました。日点委の構成団体である日本盲人社会福祉施設協議会点字出版部会での取り組みを紹介し、対応していただきました。

また、点字を学ぶ方のために出版されている書籍に、『日本点字表記法 2001年版』に対応せず古い表記のまま出版され続けている書籍があるという問題点を指摘してくださったメールもありました。これには、HPのお知らせで、「出版社」と「点字表記に関する書籍を購入される方」に注意を促しました。

点字表記に関する質問のうち、他の団体の発行書籍に関するものは、そちらにお問い合わせいただくようお願いしています。この原稿に向かっている現在、医学用語の点字表記に関する質問を受けています。次回の事務局会で回答を検討する予定で、質問された方にはお待ちいただいています。

点字表記に関するお問い合わせに対しては、HP担当者の判断でお答えすることはできませんので、ご質問を確かに受け取ったことと、担当の者が検討のうえお答えするのでお待ちくださいと、まずは返信することにしていきます。

終わりに

この1年を振り返ると、日点委のHPは、固定客向けの専門店の役割を果たしていると言えます。これは、HP開設の目的に叶っていますし、今後も点字・点訳に関わる方々に情報をお伝えしていくことが、日点委の大切な役割であると認識しています。加えて、今後は点字をより広く伝えるために、間口を広く、海外も含めて訪問しやすい、訪問したくなる品揃え（情報）も必要かもしれません。

（ホームページ担当 加藤 三保子）

点字関係文献目録 (その13)

主に2010年以降に刊行された点字に関する単行本や小冊子、日本特殊教育学会等、障害者の教育や福祉に関する学会において発表された論文、社会福祉法人視覚障害者支援総合センターの編集になる「視覚障害—その研究と情報—」(No. 269~291)等に掲載された点字関係の文献を集録しました。

単行本・小冊子等

- 日本点字委員会 『日本の点字 第35号』(点字表記法の統一と体系化をめざして「点字表記法」のあり方を考える インターネットを活用した点字教育システム「ひとりで学べるたのしい点字」等) 2011年3月
- 日本点字委員会 『日本の点字 第36号』(ブライユ伝翻訳余話 日本点字委員会ホームページの開設と今後の運営について 医学用語の点字表記について等) 2012年1月
- C・マイケル・メラ著 金子昭・田中美織・水野由紀子共訳 『ルイ・ブライユの生涯 天才の手法』 日本点字委員会(発売 大活字) 2012年6月
- 小林雅子・石井薫著 筑波技術大学 情報・理数点訳ネットワーク監修 『英語点訳ガイド — 点訳者が書いた教科書 —』 筑波技術大学 2008年3月
- 『点字のビッグイベント報告書 — ルイ・ブライユ生誕200年・石川倉次生誕150年記念』 日本盲人福祉委員会 発行年月記載なし 非売品
- 川村智子著 『楽譜点訳の基本と応用』 明石書店 2009年11月
- 北川和彦編著 『光は闇より第二部 点字の父ルイ・ブライユ — 生誕200年記念』 北川和彦 2010年3月
- 慎英弘著 『点字の市民権』 生活書院 2010年11月
- 視覚障害者支援総合センター編 『点字から未来を 日本点字120年記念作品集』 視覚障害者支援総合センター 2010年11月
- 全国視覚障害者情報提供施設協会 『G-10とマナブくんの点字教室』 大活字 2011年6月
- 福井哲也著 『やさしい英語点字入門 改訂版』 日本ライトハウス 2011年7月
- B'Score プロジェクト編 『改訂版 パソコンで学ぶ点字楽譜の作り方』 カットシ

ステム 2011年8月

全国視覚障害者情報提供施設協会 『点訳のてびき 第3版 指導者ハンドブック
第2章 語の書き表し方編』 大活字 2011年11月

全国視覚障害者情報提供施設協会 『点訳のてびき 第3版 指導者ハンドブック
第3章 分かち書き編』 大活字 2012年3月

長江まゆみ著 『点字に役立つ国語』 日本点字技能師協会 2012年3月

阿佐博著 『点字の履歴書 — 点字に関する12章』 視覚障害者支援総合センター
2012年4月

阿佐博著 『父のノート — 盲界九十年を生きて』 視覚障害者支援総合センター
2012年4月

日本点字技能師協会編 『点字技能検定試験の対策 過去問題(第12回)の正答と解説』
日本点字技能師協会 2012年4月

日本点字技能師協会編 『中学英語の点字教科書を見てみよう』 日本点字技能師協
会 2012年4月

広瀬浩二郎・嶺重慎著 『さわっておどろく！ 点字・点図がひらく世界』 岩波ジ
ュニア新書 2012年5月

小倉明作 『闇を照らす六つの星 — 日本点字の父 石川倉次物語』 汐文社 2012
年11月

研究誌等の論文

牟田口辰己 点字読み熟達者における手の使い方パターン(2) 日本特殊教育学会
第49回大会発表論文集 2011年

劉賢国 視覚障害者の教育に用いた読み書き文字システムの変化(1) 日本特殊教育
学会第49回大会発表論文集 2011年

長岡英司・石井薫・小林雅子・小野東・青木和子・辰巳公子・小野瀬正美・納田かが
り 点訳者のための英語点字表記解説書『英語点訳ガイド』の刊行 筑波技術大学
テクノレポート16 2009年3月

長岡英司・小野東・辰巳公子・富澤邦子・小野瀬正美・納田かがり 視覚障害者用
『マルチモーダル図書 天文学入門 — 宇宙と私たち』の刊行 筑波技術大学テク
ノレポート17(1) 2009年12月

麻生由美子・長岡英司・小野瀬正美・小野東・藤井亮輔・辰巳公子・富澤邦子・納田

- かがり 『鍼灸・医学用語の点訳音訳辞書システム』に関するアンケートの実施
筑波技術大学テクノレポート18(1) 2010年12月
- 辰巳公子・長岡英司・富澤邦子・小野瀬正美 点図作成ソフトに関する手引書の刊行
と研修会の実施 — 図形点訳ソフト・エーデルの利用拡大を目指して — 筑波技
術大学テクノレポート18(1) 2010年12月
- 長岡英司・田中直子・小野瀬正美・納田かがり 情報・理数点訳ネットワーク事業の
5年間 — 参加点訳者を対象とする調査の実施 — 筑波技術大学テクノレポート
19(1) 2011年12月
- 南谷和範・工藤智行 試験問題を含む高度な文書の構造提示を点字ディスプレイで実
現するリーダーソフトウェアの開発 電子情報通信学会技術研究報告 WIT2011-
24 2011年7月
- 石橋和也・水田浩美・渡辺聡・渡部謙・渡辺哲也・高岡裕・喜多伸一 点図における
ドットパターンの識別特性の評価 電子情報通信学会技術研究報告 WIT2011-59
2012年1月
- 吉野健太郎・大墳聡・長谷川貞夫・佐々木信之・原川哲美 体表点字システムに適し
た皮膚での振動条件の検討 電子情報通信学会技術研究報告 WIT2011-93 2012
年3月
- 大田美香・小田剛・三浦研爾・塚本紗代・梅田由紀恵・花岡澄代・松浦正子・渡辺哲
也・喜多伸一・前田英一・菅野亜紀・高岡裕 中途視覚障害者向けの触読点字
e-learning の最適な読み上げ速度 電子情報通信学会技術研究報告 WIT2012-5 20
12年5月
- 原田良實 中途視覚障害者への点字触読指導 「視覚障害」No. 270 2010年11月
- 廣松沙耶花 全盲児の点字読み書き能力を育てる学習指導法 — 国語科における活動
設定と教材の工夫を通して 「視覚障害」No. 270 2010年11月
- 藤野克己 点字表記の現状と、今後のあり方 「視覚障害」No. 282 2011年11月
- 田中徹二 見直そう世界の点字 21世紀における点字の改革と世界会議「Braille21」
「視覚障害」No. 282 2011年11月
- 大谷智子 楽譜を読むということ 「視覚障害」No. 286 2012年3月
- 金子昭 ブライユ伝翻訳・発行に寄せて 「視覚障害」No. 289 2012年6月
- 松谷詩子 日本点字図書館点字教室における受講者プロフィールの変遷 「視覚障害」
No. 290 2012年7月

日本点字委員会研究協議会並びに第48回総会報告

日本点字委員会は、2012年6月2日（土）・3日（日）の両日、横浜あゆみ荘（横浜市都筑区葛が谷2-3）において、日本点字委員会研究協議会並びに第48回総会を開催し、次の事項を協議した。出席者は48名（うち委員20名）。

総会審議事項

1. 委員交代。盲教育界代表委員、菊池理一郎氏（宮城県立視覚支援学校）が田村 亘氏（岩手県立盛岡視覚支援学校）に交代した。日盲連会長と盲学校長会会長は職責上学識経験委員をお願いしているが、日盲連会長は笹川吉彦氏から竹下義樹氏に交代、盲学校長会は、現在は空席。渡辺勇喜三氏は学識経験委員を退任された。

[追記・後日事務局会において、その後の交代も含めて次のとおり確認した。盲人社会福祉界代表委員を次のとおり交代する。点字出版部会：高橋秀治氏（ロゴス点字図書館）→白井康晴氏（東京点字出版所）。情報サービス部会：高橋恵子氏（視覚障害者総合支援センターちば）→大澤 剛氏（三重県視覚障害者支援センター）。盲学校長会選出の学識経験委員交代：田中省三氏→荒井勝夫氏。]

2. 2011年度ホームページ利用状況について報告が行われた。

3. 『ルイ・ブライユの生涯 天才の手法』出版に至る経過が報告された。

4. 世界点字協議会（WBC）に関する報告が行われた（田中徹二副会長）。世界盲人連合（WBU）が2009年のルイ・ブライユ生誕200年に当たり、WBU として点字を見直す必要がある、ということで、2012年までの3年間にわたって会議を開くことを決めた。WBC は1回目を2009年、マドリッドで行い、その活動方針を決めた。第2回会議は、2011年1月にデリーで開催され、その中でユネスコから発行されている“World Braille Usage”（世界点字一覧表）の第3版を発刊してもらい、などが決議された。また、日本から ISO の TC175/SC7（アクセシブル・デザイン）に、「点字サインの原則」を提案するので協力してほしいと要請した。さらに、国際会議「点字21」をドイツ・ライプツヒヒで2011年9月に開催することで、その企画が報告された。「点字21」は、世界各国から約400人の点字専門家が集い、点字に関するさまざまな研究や実践が報告された。会議終了後、WBC 第3回会議が開催された。

5. あり方検討委員会の答申（後出）を受けて協議を行い、次の2点が承認された。

① 『日本点字表記法』検討委員会」を発足させる。委員会の任務は、「あり方検討委員会」の答申を受けて、その中に示されている課題を中心に、その内容、及び解決

策について検討する。検討の期間については、2年を目途とする。途中経過を総会に報告する。「検討の過程において、会員、事務局員、会友に可能な限り情報提供して、意見の集約に努める」旨の要望があった。②委員について、木塚泰弘^{やすひろ}会長より、「あり方検討委員会」7名（金子昭^{あきら}、藤野克己^{かつよし}、加藤俊和^{としかず}、加藤三保子^{みおこ}、福井哲也^{てつや}、宮村健二^{けんじ}、渡辺昭一^{しょういち}）に、木塚泰弘、田中徹二^{とちやまひらく}、当山啓^{よしお}、岩屋芳夫^{よしお}、白井康晴^{みずたによしふみ}、水谷吉文の6名を加えた計13名が提案されたが、その扱いについては事務局会に付託する。

[追記・総会で事務局会に付託された「日本点字表記法」検討委員会の構成について、総会における提案どおりの計13名が、会長より委嘱された。]

研究協議

1. 昨年、近畿点字研究会より提起された「外字符で書き表すことができる用例の追加・変更に関する提案」について討議した。この問題はいったんここで終わらせ、もしさらに提案があれば近畿から改めて出してもらうこととした。

2. 東海点字研究会より「カッコ類の切れ続き」および「数を含む語の書き表し方」について提案が行われた。この提案を持ち帰り、各地域で検討・討議し、次回総会において報告することとした。

3. 「点字表記法」あり方検討委員会より、『日本点字表記法』のあり方について（答申）が報告された。はじめに「表記法」の役割について提起された。次いで各諮問項目について検討結果が報告され、「2001年版」には、多くの課題があることを確認した。これらの課題を解決し、よりよい「表記法」とするために、「表記法」改訂のための新しい段階に踏み出す必要があるという認識で一致した、と結ばれた。答申を受け、表記法の検討に入る方向で進むこととした。

4. 「医学用語の点字表記について」が公表されてから1年経過したが、①あはき国家試験の点字表記にどの程度反映されたか、②各施設・団体での扱いについて、報告が行われた。

5. 関東地区小委員会より、『日点委のあり方』について寄せられた意見（「日本の点字」第35号に掲載）について報告が行われた。会則に基づいて、委員の務めを確認した。

6. ①近畿点字研究会から、「第47回日点委総会に提出された木塚委員の提案に対する近畿点字研究会の検討経過と意見のまとめ」が報告された。

②木塚泰弘委員より、「昨年の総会に対する『提案の一部修正と補足』」の提案が行われた。都合2回にわたって討議したが、疑問視する声、新たな混乱を招くといった意見があり、「提案を受けて討議をした」という形でまとめた。

編集後記

「日本の点字」第37号をお届けいたします。

福井哲也さんの巻頭言「私は“カミ”を信じます」は、新しいものに関心を持ち、追求しつつも、それには決してなじみすぎない筆者の姿勢に教えられました。

「日本点字表記法のあり方」について広く意見を求め、寄せられた15名の意見を「日本の点字」第35号に特集として掲載しました。いただいたご意見を前に進めるために表記法あり方検討委員会をスタートさせました。3回にわたる検討を経て、会長に答申が提出されました（『日本点字表記法』のあり方について（答申）」掲載にあたって）。日点委では、この答申をさらに具体化させるために作業を進めています。

日点委のホームページは、2011年9月1日オープン以来、1年が経過しました。この1年の動きをご覧いただき、今後に向けてのご意見をいただければ幸いです（ホームページ開設から1年）。

2012年にできた会を二つご紹介します。

一つは日本盲教育史研究会です。10月13日、設立総会および第1回研究会が日本点字図書館において開催されました。第1部の設立総会において、会長に引田秋生氏^{ひきたあきお}、事務局長に岸博実氏^{ひろみ}が選出されました。会員120名余。第2部の研究会の中で、〈「六つ星の光」概観〉の研究発表がありました。

《「六つ星の光」は、東京盲啞学校の盲生同窓会によって、明治36年6月より発行された月刊の総合雑誌である。発刊当時は、やっと点字が出来たのに読むべきものが少ないという状況だったこともあり、貴重な読み物として歓迎された。昭和5年、発行は桜雲会に引き継がれ、昭和40年頃まで発行されていたようだが、正式に廃刊が決定されないまま休刊となり、今日に至っている。同誌を発掘・整理し、墨字化するプロジェクトが進められている。墨字化した資料を、研究協力者によって研究誌に掲載する段階まで進めることができた。》

そうした内容の発表でした。今後ともこの会の研究の中から、点字に関する資料が発掘され、私たちに紹介されることを期待したいと思います。

もう一つは、視覚障害者への点字の普及と一般社会への点字の普及・啓発を旨とした日本点字普及協会の発足です。12月8日に設立総会が戸山サンライズにおいて開催

されました。代表・高橋實氏。最近、点字離れなどと言われていますが、同協会は、点字を使う視覚障害者をもっと増やすために、「点字を覚えるのは難しい」「音声情報さえあればいい」といった風潮を改善することに取り組みます。一般社会に対しては、点字を学ぶことを通して、点字を使う人々へ思いを広げ、視覚に障害を持つ人々の生活上の不自由さを理解して、ふだんの生活の中でさりげないサポートができる人を増やしていくことを目指しています。同協会の今後の働きに期待するとともに、これを機に、点字の普及・啓発について私たちに何ができるかを考えさせる機会となればよいと思います。

最後になりましたが、お二人の訃報をお伝えします。

直居鉄さんが2012年2月29日に、小林一弘さんが2012年12月10日に逝去されました。

直居さんは、1990年度から2001年度まで、日点委学識経験委員、および事務局長としてお働きくださいました。特に下澤仁さんの後任の事務局長として、阿佐博会長とともに会の運営に力を発揮されました。退任後は会友として、亡くなるまで会を支えてくださいました。享年85。本誌の「直居鉄さんを偲んで」をお読みいただければと思います。

小林さんは、1971年7月（第4回総会）から1977年度まで日点委事務局担当、1972年度から1993年度まで盲教育界代表委員、1994年度から2010年度まで学識経験委員、および副会長を務められました。勇退後は会友として日点委の働きを見守っていただきました。事務局担当となられる前から、『日本点字表記法（現代語篇）』発行（1971年3月）のために、点字原稿の墨字訳を担当されるなど、日点委と深いかわりをもっておられました。40年以上にわたって、温厚な人柄と、教育実践に裏打ちされた深い学識とによって、日点委を創成期から今日に至るまで育てていただきました。2010年11月1日、都内において「東京盲啞学校発祥の地・日本点字制定の地」記念碑の除幕式と記念式典が開かれましたが、式典の中で小林さんは、「築地時代の東京盲啞学校の教育」と題して長時間にわたる講演をなさいました。よく準備された、感銘の深い内容でした。今にして、健康を気遣いながらのご準備とご講演であっただろうと察します。東京都立文京盲学校校長、全国盲学校長会会長、全国特殊学校長会（現全国特別支援学校長会）会長などを歴任されました。享年77。

日本点字委員会の発展にご尽力くださったお二人のご冥福を、心からお祈り申し上げます。
(金子昭)

頒布図書案内

ルイ・ブライユの生涯 天才の手法 (日本点字制定120周年記念出版)

著者：C・マイケル・メラー

翻訳：金子 昭 田中美織 水野由紀子

発行：日本点字委員会

墨字版：B 5判、232ページ、2012年6月発行、価格2,000円＋税

点字版：全4巻、2012年10月発行、価格7,200円

最新の研究に裏打ちされていることに加えて、「ブライユの数多くの手紙を紹介しながら、その生涯を描いていること」、「ブライユの生涯を当時の歴史的、社会的背景の中で描こうとしていること」などが本書の特徴です。フランス革命後の混乱した社会において、一人の天才がどのように点字を創り上げていったのか。また欧米において、ブライユの点字が受け入れられるまでに年月を要したのはなぜか、などが、詳しく描かれています。

資料に見る点字表記法の変遷 — 慶応から平成まで —

責任編集：金子昭

編集・発行：日本点字委員会

墨字版：B 5判、730ページ、2007年11月発行、価格3,500円＋税

点字版：全9巻、2009年8月発行、価格16,200円

点字の伝来から、石川倉次による仮名への翻案、今日までの表記法の流れを、資料を駆使してたどる。点字表記法の変遷について、これほど詳しい資料と解説は初めて。30余年にわたって点字に関する資料を収集してきた金子昭氏を編集責任者に、本書をまとめた。日本点字委員会創立40周年の記念事業として発行。点字に興味をお持ちの方には、ぜひ手元においていただきたい1冊。

お問い合わせ・ご注文

墨字版：株式会社 大活字 (TEL03-3259-2200 FAX03-5282-4362)

日本点字図書館用具事業課 (TEL03-3209-0751 FAX03-3200-4133)

点字版：日本点字図書館点字製作課 (TEL03-3209-0671 FAX03-3209-0672)

(どちらの点字図書も「点字図書給付事業」の対象になります)

日 本 の 点 字 第37号

2013年 2月14日発行

発 行 日 本 点 字 委 員 会

〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1-23-4

日本点字図書館内

電話 (03)3209-0671

FAX (03)3209-0672

振替口座 00100-1-42820

ホームページ <http://www.braille.jp/>

印刷所 コロニー印刷

〒162-0034 東京都中野区江原町2-6-7
